

---

# 運命街道～水地獄から抜け出した男～

yuriko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命街道〜水地獄から抜け出した男〜

### 【Nコード】

N3278D

### 【作者名】

yuriko

### 【あらすじ】

天下の警視庁捜査一課に在籍する刑事・高木渉巡査部長。推定年齢二十六歳、独身・一人暮らし。一応、同僚であり先輩でもある恋人（と思われる存在）アリ。ある日、そんな彼の身に起こった出来事とは……。タイトルを「水地獄、転じて、運命街道に。」から「運命街道〜水地獄から抜け出した男〜」に変更しました。『テーマ小説参加者募集！24』参加作品です。ファンフィクションですが、是非ご覧下さい。

## （前書き）

この小説は、「小説家になろう」秘密基地」の「\*仲間募集\*」の掲示板にあった『テーマ小説参加者募集！24』の中で企画されたテーマ小説のお題・「道」を基に制作した作品です。

他の先生が同じく投稿された作品も読む事が出来ます。「道小説」（入力の際に“「」”は必要ありません）で検索すると出てきます。

突然だけど、オレは喉が乾いている。物凄く乾いているんだ。こういう時に限ってオレン家の冷蔵庫の中身は何故かラッポさ。それならさっさと水でも飲んどけよって感じかも知れないけど、飲みたくても飲めないんだよ。

……え？ 何故かって？

実は蛇口から水が出ないんだよ。あ、いや、当然光熱費はちゃんと払ってるさ。でも出てこないんだよなあ。

「何でこういう時に限って水道が使えなくなるんだよ……。と、ととにかくみみみ水うー@ + ¥ | % - ~ \* \$ " ' ! 」

あまりの渴きっぷりに、パニック状態ど真ん中・万歳だよ。思わずテンパっちゃったよ。

それでどうにかしなきゃと思って取り敢えず管理人さんが何か事情を知らないかと思って問い合わせてみたんだ。そしたら、何て言ってきたと思う？

『すいませんね、緊急だったんですよ。一応入り口の掲示板にも貼り付けといたんですけど、誰も気付かれないって事も考えて皆さんに直接お尋ねしたり、居なかった方の所にはポストに連絡のチラシを投函させて貰ったんですがね。高木さんのポストにも入れたはずですよ。どうやら入れ忘れていたみたいですねえ』

「ど、どういう事ですか？ 僕の所にだけ入れ忘れていたって言われても」

『入れ忘れの件は本当にすいません。で、チラシの内容ですけど、実は水道のちょっとしたトラブルがありまして、急遽夜十時から明日早朝の四時頃まで工事する事になってしまいました。気付かれませんでした？』

「はあ。あの工事、水道のだったんですか」

おいおい勘弁してくれよ！　どれだけ適当な連絡をしていたんだ？　まあそりゃ、仕事が忙しくて帰りが遅くなって管理人さんには会えなかったけどもさ。でもだからって大事な連絡はきっちりしてもらわないと困るでしょう！

きちんと知る事が出来ていたらさっさと買出しに出掛けてたのにさ。くそお。

「と、とにかく水・水・水・水・水・水・水・水・水うーっ！　水があつ！　水くれ水水うっ！　オレを地獄に突き落とす気があつ！？」  
神様の馬鹿馬鹿馬鹿！」

……　って今はジタバタわめいてる場合じゃない、か。とにかく喉を潤す事を考えなくちゃ。

でも疲れてて眠いんだよなあ。いつそのこと、頑張つて我慢してしまおうか。……いや、駄目だ。市民の安全を守る刑事たるもの、万が一喉の渴きを我慢しただけで体調を崩してしまったら最悪じゃないか。たかが喉の渴き、されど喉の渴きってヤツだ。

ハア、さっぱりしたい所だけどシャワーを浴びるのは朝なんだよな。ま、いいや。そこは諦めるとするか。<sup>あきら</sup>仕方無い、さっさとコンビニにでも行ってくるか。

近所のコンビニまで、オレが住んでいる所から数分で着く。喉が渴いただけなら自販機でどうにかするっていう手もあるんだけど、さっきも言ったように冷蔵庫は中身が空だったから、ついでにちょっとした買い物を兼ねているんだ。潤いを欲しているモノだからつい早足になる。

早く辿り着いてくれ、オレの足。

さあ次の角を曲がればいよいよ目的地だ。飲み物は牛乳も買おうかな。他は、とりあえずカップ麺とおにぎりとお惣菜、ついでお菓子も買い込もうか。小腹空いてるもんない、お弁当も買っちゃおうかな！ ルンルン……っと、アレッ？ 辺りがちつとも明るくないぞ？ ま、まさか！？ あ、貼り紙だ。何か貼ってある。

“ 改装中につき只今休業中 ”

……。

う、嘘だ！？　こんな時に。冗談に決まってるよな。一瞬「ガビーン！」とか思っちゃったじゃん。

目を凝らしてもう一度貼り紙をよく見てみた。

“改装中につき只今休業中”

おーい何でやねん！　何で開いてへんのや！？　なんでやねん！  
ナンデヤネン！　なーんーでーやーねーんー！

……。

つ、ツイてねえ！　今日のオレ、ツイてねえ……って、ビックリして思わず妙な関西弁を使っちゃったじゃないか！　しかもついついオレらしくない口調になっちゃったよ。

どうしようかな。買い物もしたかったんだけどなあ。うーん、もう少し歩いた所に二十四時間営業のスーパーがあるけど、ちょっと遠いんだよ。喉の渴きは我慢できないし、仕方ないから近くの自販

機を探して、何か買って飲みながら歩いていくとするかな。

運良くすぐに自販機を見つけれたオレはお茶のペットボトル（冷たいやつ）を買った。因みに、500mlのやつだ。

飲みながら歩くつもりだったけどその場で一気に飲み干した。

「くっはあっ！ 何てうまいんだっ！」

どれだけ喉が渴いていたんだ、オレ。でもまあ、少しは水地獄から生還したって感じかな。

空になったペットボトルを自販機横のゴミ箱に捨てた後、軽やかな足取りでスーパーを目指した。

いい気分で再出発したはずなのに、それから結構歩いた。何故だろう？ 歩けども歩けども、スーパーになかなか辿り着かない。道を間違えたのだろうか？

でも今歩いているのは、オレがよく見知った道なんだけど。間違える筈がない。あまりの渴きで頭が混乱したままだったんだろうけどさ。しっかりしなきゃ！

だけど辿り着かない。どうしたんだろう。道は間違っていないというのはいちみだったのかなあ。何だか嫌だな、グスン……。

そんな時、誰かがオレの肩を叩いた。



「もしかして高木君？ どーしたの、こんな所で」

「！ え！ ちょっと、佐藤さん！？ そりゃ僕の台詞ですよ！ 佐藤さんこそ何でこんな所にいるんですか！？」

ビツクリしたあ、まさか背後から佐藤さんが現れるとは思わなかったよ。でも確か佐藤さんの自宅はこの地域外だったと思ったけどなあ。っていうか、佐藤さんってばキョトンとした顔をしてる。その表情、<sup>かお</sup>ちよっと可愛いかも……。

「ちよっと！ なにニヤついてるの？ まさか」

「べ、べ、べべ別に、ぼぼ、僕は佐藤さんと変な事になるなんて全くもって考えてなんかいませんよっ！」

「え？ 私は『何か良い事でもあったの？』って聞こうとしたんだけど……」

うわっやばい、オレ失言しちゃった！ 多分オレの顔、赤くなってるし。その上妙な空気が漂っちゃってるよ。しかも佐藤さんがジト目で見てるし。とにかく話題を変えなくっちゃ。

「あ、あのう。佐藤さんは何故ここに？ お住まいはこの地域じゃないですよね？」

「ええ。ジョギングしてたら結構遠くまで来ちゃって。そしたら、偶然高木君とバッタリ遭遇したって訳。アナタこそどうしたの？もしかしてこの近所に住んでるの？」

こんな深夜に女性が一人でジョギングだなんて、何てたくましいんだ。さすが佐藤さん、お疲れッス！

オレがここに至るまでの経緯を佐藤さんに話すと「あのスーパーなら一本隣の道じゃなかった？」と教えてくれた。

どうやら佐藤さんはたまにこうしてジョギングをしているらしく、以前にも何度かこの辺りまで来た事があつたらしい。その甲斐あつてか、この近辺の大体のルートを覚えてたんだつてさ。数度通つただけで。記憶力良いんだなあ、感心しちゃうよ。

「それにしても高木君つたらとんだ災難に遭遇したものね。水が出ない上にあそこのコンビニがお休みだったなんて。まさしく“水地獄”ねえ。でもだからって……もしかして意外と方向音痴なのかしら？ フフフ」

「あのコンビニの事も知ってたんスカ！？　つてか、笑わないで下さいよ」

「あはは、ごめんごめん！　　買い物するんでしょ？　私、お供しても大丈夫かしら」

「ええまあ、いいッスけど……」

笑われたのはちょっとショックだった。悪気は無いんだろうけどさ。まっ、手を合わせて謝る姿が可愛いから、許すとするかな。

“水地獄”に陥つたお陰ではあるけどさ、生還できた上にプライベートで佐藤さんに偶然出会えたなんて凄く運命感じちゃうよ。

よおし！　少しでもデートっぽくていい感じな雰囲気満喫するぞ！　神様仏様お母様、ありがとーございまーすっ！

「悪いわね、ついではいえ飲み物とか奢ってもらっちゃって」  
「いえ。だってお互い様じゃないですか」

「そうね、私達って残念ながら何気に二人揃って只今減給二ヶ月目だし。……なんかごめん……」

「佐藤さんは気にしないで下さいよ。僕なら大丈夫ですから、ハイ……」

買い物が終わった途端、二人とも三ヶ月の減給処分が下されている途中だった事を思い出して、二人してテンションガタ落ちだ。まあ、あの時は自分達が悪かったんだけどまさ。護送中の犯人を、少し目を離れた隙に別の人物に殺されてしまったんだから。偶然毛利探偵が居てくれたお陰でそのずる賢い殺人犯を捕まえる事ができたんだけどね。二度とああいった失敗は御免だな。

「それにしても、今日はまさか佐藤さんと遭遇するとは思いませんでしたよ」

「そうよね。私も思っていなかったわ。二人とも非番ではなかったけど、今日は一緒じゃなかったものね」

付き合った二人が偶然出会うなんて奇跡ね、と彼女が微笑んだ。以前にも似たような言葉を交わして話をした覚えがある。その時、確か毛利さんと蘭さんにコナン君が同じ車中にいた事すら忘れて……オレと佐藤さんがキス、しようとしてたんだっけ……。

うわあっ。何だか思い出すだけで顔から火が出そうだよ！

オレが一人で勝手にもがいていると、横にいた佐藤さんが突然叫んだ。

「私、決めた！ 今二人で歩いているこの道の事、これからは“運命街道”って呼んじゃおっかな」

「え？ はあ！？ いきなり何言ってるんですか！？」

彼女が冗談めいた事を言うなんて珍しかったから、つい変な声を挙げてしまった。佐藤さんはちよっぴりムツとしたけれど、照れながらもその理由を教えてくれた。

「何よ、別にいいじゃない。せめて私の中だけでもそう呼びたいの。この道を通ったお陰で、高木君の意外な一面を知る事が出来たし。こうして肩を並べてデートめいた空気を味わえたもの。最近忙しくてなかなか二人きりになれなかったしね。だから、私達を巡り合わせてくれたこの道こそが、私達にとつての運命街道！ ってね」

「あ、そうか。そうですよね、うん。そっかそっか。ちよつと強引な感じもしますけど僕達、かなり運命感じ合っちゃいましたよね！？」

「あら、その言い方は少し調子に乗りすぎじゃないかしら、高木渉 巡査部長君？」

「は、ははは、すみませんねえ、佐藤美和子警部補殿」

二人して妙な冗談を言い合いながら、三つ先の角で別れるまでの間、楽しく過ごした。

最近のオレ達は、佐藤さんが言うように、確かに忙しくてすれ違っていたかも知れない。

しかし参ったな。さっきも感じたけど、ホントに“水地獄”のお陰なんだよな。こうして他愛の無い幸せな時間を過ごしているのは、こういったラッキーがいつまでも続いてくれたら良いのになあ。で

もそれじゃラッキーって呼べないか。

正直言つと、神様という存在を一瞬でも恨んじやったけど、災い転じて福となすっていうのはこの事なんだよな。

嗚呼神様、申し訳ございませんでした。どうかお許しを……。

次の日の朝起きると、水道は復旧していた。待望のシャワーを浴び、佐藤さんと共に買い物をした朝ご飯に有難くありつく。大切な人と選んだご飯はおいしい。出来る事ならば、願わくば愛情が込められた手料理をじっくり味わいたいけど。

彼女に向かって「オレと結婚して下さい」という言葉をなかなか口にできない。それでも彼女の左手の薬指にはオレが贈った指輪がきらりと輝いている。だけど、そういう事に“うとい”彼女は、その指輪の“本当の意味”を知らない。

ようやくオレが「結婚」の言葉を口にできた時、指輪の本当の意味を知らないあの人はどんな顔をするんだろう。果たして喜んでくれるだろうか、はたまた拒こはまれるだろうか。

結果を知る事になるのは、もう少し先の未来になりそうだ。



## （後書き）

皆さんこんにちは、お久しぶりです。もしくは初めまして。実は“ダメ人間”な作者・祐里子です。（何だそりゃ）

やっと新作を投稿出来ました。パソコンの前に何とか嚙り付いて書き上げました。そのお陰で今、腕が少し変です。よせばいいのに

今回の小説は、本当は『テーマ小説参加者募集！23』（お題は「水」）の参加作品として投稿する筈の作品だったんですね。参加表明もしていたのですが、結局投稿出来ずじまいになってしまったんです。折角書きかけた小説だったし何とか生かせないかと思いついて、「道」がお題のテーマ小説として投稿する事にした次第です。お陰で若干ややこしいタイトルですが、あまり気にせず読んで頂けると有難いです。

この作品の粗筋は、簡単に言えば、“水が飲めなくてパニックの高木刑事が結局はそのお陰で大好きな人に道端でばったり出くわせたり良かったね”という感じの作品（本当か？）ですが、当初のオチとは内容が変更されています。

今回は“愛しい人と遭遇できたから良かったじゃん”という風に終わっていますが、実は当初“夢オチ”にするつもりでした。その場合の展開は話すと長くなりますが、警視庁の皆さん+水の大群が押し寄せる……みたいな感じでした。作者すらよく分かっていない展開（？）が目白押しだったんです。

内容を高佐の“この二人、ちょっといい感じ？”方面に変更したら当初の展開よりも書き易そうな気がしたし内容も良さそうだったので、今回のシナリオを選択しました。最終的にハッピーエンドになれたかどうかは微妙なラインですけどね。

私自身、今回の作品に、デビュー作で頂いたご指摘を生かしていないのではと思っています。もしかしたらほんの数十パーセントも生かせていないかも。

漢数字とそうでない数字の使い分けには気を付けたつもりです。それを含めて、記号の扱い方について等、困った事があれば参考にしている某サイト様（小説の書き方について、そりやもう詳しく解説されていて凄いいサイトなんです）をお手本に頑張ったつもりです。それすらあまり生かされていないかも知れませんが……。

時としてグダグダが目立つ事がある私ですが（滝汗）、そんな私の作品で良かったらこれからも相手してやって下さい。  
それでは、またどこかでお会いしましょう。

2007/12/29 祐里子



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3278d/>

---

運命街道～水地獄から抜け出した男～

2010年10月10日05時40分発行